

第38回 七五読み古事記勉強会

因幡の白兔

氣多之前

和邇

倭塾サロン
小名木善行

大穴牟遲神



前回までのお話

八俣遠呂智神話のあと、古事記は

須佐之男命の系譜を書いていました。

須佐之男命から六代目にあたる子孫が

大国主神であることが

明らかにされていました。



今回のお話（現代語訳）

大国主神

（おほくにぬしのかみ）

の兄弟の**八十神**

（やさかみ）

たちは国を大穴牟遲に避つて去り行きました。

去つた理由は、八十神たちが、稲羽（いなば）の国の

八上比売

（やかみひめ）

の心を得て結婚しようと、

共に稲羽に向かったときに、

大穴牟遲神

に荷袋を背負わせて、従者（ともびと）として

率いていたときのことです。

八十神たちが**氣多の岬**に着いたとき、

そこに裸（はだか）の

菟

（うさぎ）

が伏せていました。

八十神たちはその菟に、

「お前がすべきことは、海水を浴び、

高山の頂上で風にあたって伏せていることだ」

と言いました。

菟が八十神の教えの通りにして伏せていると、
身体の海水が乾くに従つて、肌が風に吹かれて
ことごとく裂けてしまいました。

あまりの痛みに苦しんで泣き伏していると、
最後にやって来た大穴牟遲神が菟を見て、
「**どうしてお前は泣き伏しているのだ**」
と聞いたのです。

おほくにぬしの	あにおとに
いますやそがみ	みなくにを
おほくにぬしに	さりまつる
さりますゆゑは	やそがみが
おのおのいなば	やがみひめ
こころをえては	まかむとし
ともにいなばに	いきしとき
おほなむちかみ	にをおわせ
ともびととして	みひゆきき
ここにけたさき	いたるとき
はだかのうさぎ	ふせるなり
うさぎにいはく	やそがみは
「なはこのうみの	しほあびて
たかやまのおの	うえふせて
かぜにふかれて	ふせておれ」
ゆゑにうさぎは	やそがみの
おしへのとほり	ふせいたる
しかしてしほの	かはくまに
みのかはごとに	かぜふかれ
さけていたみて	くるしくて
なきふすときに	おほなむち
さひごにきたり	うさぎみて
「なにゆゑなれば	なきふせる」

故此大国主神之兄弟
八十神坐然皆国者
避於大国主神
所以避者其八十神
各有欲婚稻羽之
八上比売之心
共行稻羽時
於大穴牟遲神負袋
為從者率往
於是到氣多之前時
裸菟伏也
尔八十神謂其菟云
「汝將為者浴此海塩
当風吹而伏
高山尾上」
故其菟從八十神之
教而伏
尔其塩隨乾
其身皮悉風見
吹折故痛苦
泣伏者最後之来
大穴牟遲神見其菟言
「何由、汝泣伏」



岬多氣



大国主神之兄弟八十神坐

(おほくにぬしのあにおとのやそのかみ)

八十神たち（兄弟）

や たくさんの
そ 協調した



な 静かな力
む むすび
ち 知恵

大穴牟遲神



八上比売

や たくさんの
か チカラ
み たいせつな



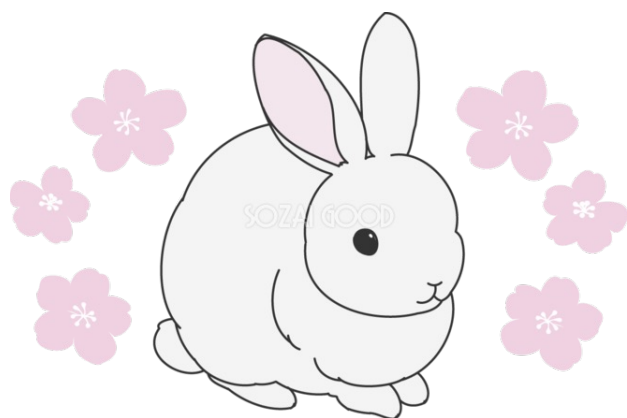
集団見合い



蒲



兎



うさぎ

菟



ネナシカズラ